
初恋ものがたり

灰音 四音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋ものがたり

【Nコード】

N8698Y

【作者名】

灰音 四音

【あらすじ】

僕が先輩と出会ったのは林檎の花咲く5月頃。彼女との出会いは偶然で、逢うつもりも毛頭ありませんでした。その日から、先輩に振り回される日々が始まったのです。

紅い林檎のように僕たちは初めての感情に染まっていきます。

僕は一体、どうしたらいいのでしょうか。

出会い

僕が先輩と出会ったのは、四月の半ば頃でした。新学期が始まりひとつ学年が上がって少々浮かれていた僕は、その時、今季最大のピンチを迎えていました。簡単に言えば、寝坊したせいで遅刻をしてしまいそうだったのです。

そんな訳で僕は自転車に跨り、全力でペダルをこいでいたのですが、どうにも間に合いそうにありません。僕の腕時計は八時二十分を示していて、あと五分もすればHRが始まっています。間に合う可能性があるとすれば、視界の右側に広がる林檎畑を横切ることだけでしよう。

僕の家と学校は直線距離だとかかなり近くなるのですが、その間に林檎畑があるので迂回しなければならぬのです。

(今日だけ、今日だけ、今日だけ……)

念仏のように何度もそれを唱えながら自転車のハンドルの方向を変え、林檎畑を駆けはじめました。正直、いけないことをしている自覚があつたので、内心ビクビクしながら畑の中を走っていたのですが、案の定といたしますか、林檎の木の下に人影を見つけました。人の姿を見つけたと同時に、通り過ぎてしまったので良くは見えませんでした。きれいな黒髪と、白い花飾りが印象的な、美しい女人だったと思います。

「おーい、その君！ 自転車の君だよ！ 止まってー。おーい！」

声に従って自転車を止めて振り返ると、先程見つけた花飾りの人が、僕のことを追いかけてきてるではありませんか。

「よかったあ、止まってくれたー！。ちよつと荷台に乗せてくれない？」

「どうして僕が!?!」

「私先輩、あなた後輩。ほら早く！ 遅刻するよ」

確かに彼女は同じ学校の制服に身を包み、最高学年を示す赤いタイを身につけています。ですが納得がいきません。何故後輩というだけで、初対面の人を乗せなければならないのでしょうか。言いたいことは沢山ありましたが、彼女の言われた通りに後ろに乗せ、もう一度漕ぎ出しました。

「いやあ、ありがとう後輩君。自転車でうちの畑に入ったこと、父さんと母さんには黙っていてあげるよ」

これが彼女　一宮先輩との出会いだったのです。

自覚

時は流れ今は秋。外はすっかり紅く色づいて、鮮やかになっています。今は黄昏時で、あたり一面オレンジ色に染められています。

そんななか、僕はどうしても家に帰る気になれず、ブラブラしていますと、遠くの方から僕の名前を呼ぶ声が聞こえてきました。やはりその声にも返事をする気になれず黙っていますと、何か、かなり硬いものが後頭部に当たり、地面に落ちる音がしたので、一体何が当たったのか確かめようと思い、振り返ってみますと、まだまだ色が薄い林檎がひとつ、そこに落ちていました。

「蓮君、無視しないでよ！ 私が呼んでいるんだからすぐに返事すること。分かった？」

少し怒ったような一宮先輩カズミヤの声。両手いっぱい林檎を抱えているので、おそらく彼女が僕の頭に、あの林檎をぶつけたのでしょう。

「すみません。考え事をしていたので、つい」

「『つい』で、私を無視しないの！」
言葉こそきついものですが、先輩の口調は優しいもので、僕の気持ちもゆつくりと風いでいきます。

先輩は、近くにベンチを見つけてそこに座り、僕にも座るように促してきたので、おずおずと、先輩の隣に腰をおろしたのですが、一体何がおかしかったのか、一宮先輩がクスクスと笑い出した時は困りました。何がそんなにおかしかったのか尋ねようと、僕が口を開くより先に、先輩が「で。何があったのかな」と、聞いてきました。

「特に何もありませんよ。何ですか、急に」

「ん〜？ 蓮君のことだから、きつと理由があつて帰らないのかなつてさ。何もなければ良かったね」

先輩はそう言ったのですが、ベンチから立ち上がる気配はありません

ん。手に持っている林檎を渡してくるのです。

「いいませんよこんなの。色は薄いし、熟しきっていないじゃないですか」

「まあまあ、貰っておきなさいよ。先輩からのプレゼントです」

紅くない林檎をもらっても、全くもって嬉しくないのですが、どうしてでしょうか、一宮先輩がくれたと思うだけで、胸の奥が暖かくなっているのです。

思い出してみれば、彼女と出会ってから、先輩は何かと僕の世話を焼いているように思います。紙で指を切った時は絆創膏ばんそうこうを渡してくれましたし、探しものが見つからない時は一緒に学校中を探してくれました。先輩はただの世話好きなだけかもしれませんが、僕の話をお身に聞いてくれ、僕のために怒ったり泣いたり、時には一緒に悩んでくれて、気がついたら、僕の中の先輩はどんどん大きくなっていくのです。今だって、本当は何があったのか、或いはなかったのか聞きたかったでしょうに、黙って僕が話すのを待っていてくれています。

「何も……聞かないんですか」

「さつき『特に何もありませんよ』って言ってたじゃない。聞いてほしいことでもあるの?」

ありませんと答えると、彼女は手の中の林檎をいじりはじめました。一宮先輩を見ていると、フワフワと落ち着かない気持ちになるのですが、それと同時にポカポカと胸が暖かく、優しい気持ちになるのです。一体この感情は何なのでしょう。

「蓮君、蓮君」

「なんですか」

「林檎、もうひとつもらってくれないかな? 近所の人に配ってるんだけど、余っちゃいそうなんだ」

「確かに、そんなに色が薄いもの、誰も欲しがらないでしょうね。

仕方ないから、もらってあげますよ」

しまった、こんな言い方したいわけじゃないのに。恐る恐る先輩の

顔を見ると、穏やかな表情をしていたので、少々面食らいました。驚いたせいなのか、心臓がものすごい勢いで脈打っていて、痛いです。

「はい、もらってくださいな」

先輩の白い手の中に、薄紅うすくれなひに染まった林檎が収まっています。彼女の手から林檎を受け取る時、和東に先輩の肌と触れてしまい、慌てて手を引つ込めてしまったので、せつかくの林檎が落ちてしまいました。

「す、すみません！　すぐ拾います！！」

「そんなに慌てる必要ないよ。大丈夫、大丈夫」

林檎を拾い上げ、すぐに一宮先輩と別れたのですが、先輩と触れた手の先が、とてもとても熱いのです。

手の中にある色の薄い林檎を見れば、すぐに先輩の顔が浮かんでくる。。

僕は一宮先輩が好き、なのかも、しれません。

むすび

自分の気持を自覚してから、数週間が過ぎました。時間が過ぎるのがこんなに早く感じるのは、初めてです。

あの日から学校で先輩を見つけても、逃げるようにその場を離れることが多くなりました。彼女の声を聞くと耳が熱くなり、彼女の姿を見ると胸が苦しくなるのです。先輩の方から話しかけてくれることもありませんが、目を見て話すことが出来ず、心配する先輩に対して曖昧に言葉を濁し、早々にその場を逃げてばかりです。

そのくせ、先輩の声が聞きたくて、先輩の姿が見たくて、先輩に僕の名前を呼んでほしくて堪らない時が、あるのです。一体僕は、どうすればいいのでしょうか。

「はああ」
思わずため息がこぼれました。もう胸の中はいっぱいで、ため息を ついても、全く軽くなりません。

「はああ……」
ため息は、深くなる一方です。

放課後。帰り道を歩いていると、林檎畑が見えてきました。あとから聞いたのですが、この畑は一宮先輩かすみやのご家族のものなんだそうです。とても丁寧^{ていねい}に育てられているようで、林檎一つ一つがすごく美味しそうに見えます。先輩自身も、畑仕事を手伝っているのだとか。

ああ、まただ。気がつく^{きがつく}と僕は、先輩のことばかり考えている。先輩のことを考えると幸せな気分になるのですが、同時に苦しくも なります。

「はあ〜」
ここから見えるすべての林檎は紅く染まり、あの時もらった色の薄い林檎の面影はありません。

「はあ〜」

「なにため息ついてんの」

先輩の声が聞こえ、急いで振り返ってみると、そこには彼女の姿がありました。

「先輩には関係ないでしょう」

思わずきつい口調になってしまい、傷つけてしまったのではないかと不安に思い、一宮先輩の顔を伺うと、少し困ったような顔をしていました。

「確かに関係ないかもしれないけど、気になるよ。だって大切な後輩の一人なんだもの」

ああ、先輩の言葉に一瞬でも期待した僕は、馬鹿なのでしょうか。彼女の口から愛の言葉が溢れるのではと、思ってしまったのです。

「ねえ、何があったのか話してみない？ それだけでもきつと、楽になるよ」

確かにこの気持ちの口にするれば、楽になるのかもしれませんが。僕は、ありのままの言葉を、ゆっくりゆっくりと音にしていきます。

「先輩にとって僕は、大勢いる後輩の一人に、すぎないんですか？」

先輩は困惑の表情を浮かべて、僕を見てきます。ああ、何を言っているんだろ。そう思っても、もうこの口は僕の意味を離れて、勝手に話して、勝手に声を発してしまつのです、止まらないのです。

「僕にとって先輩は一宮先輩だけなんです。一宮先輩は一宮先輩だけで、一宮先輩だけなんです。あれ、結局何が言いたいんだっけ」

なんだか言葉にするほど、僕の気持ちと違う気がして、口にするたび、気持ちから遠ざかっていく気がするのです。なんと言えばいいのでしょうか。たった二音二音の言葉なのに、至極単純な気持ちなのに、そんなものも伝えられない僕はやはりばかなのかもしれない。

必死になつていまの気持ちに当てはまる言葉を探していると、

「蓮君」と、先輩に呼ばれたので、「なんですか」とぶつきらばうに答えれば、「少し歩こうか」と言われたので、素直にうなずき、先輩の後について歩き始めました。そういえば、こんなに長い時間

先輩と一緒にいるのは久しぶりです。それに気がつくと、先輩と一緒にいるこの状況が妙に気恥ずかしく、この場から逃げ出したい気分になりました。

歩いているうちについたのは、僕が自分の気持を自覚した、あのベンチでした。先輩はそこに腰掛けると、「蓮君も座って」と言われたので、彼女と少し距離をおいて座りました。

「蓮君は口が悪いよね」

僕が座ると同時に言われたので、反論するタイミングを逃してしまいました。僕はただただ驚いて、先輩の話を聞くだけです。

「口が悪くてひねくれていて、私が困るようなことばかり言うし、私のことバカにしたり、見下したようなことばかり言うけど、そのあと必ず『しまった』って顔してこっち見てくるんだよ。蓮君って、本当は優しいのにすごく不器用なんだね」

僕は今、褒められているのでしょうか、貶されているのでしょうか。疑問に思いましたが、あまりにも楽しそうに彼女が話しているので、突っ込むことができません。

「高い場所にある本を文句言いながら取ってくれたり、怖い男子に絡まれたとき私をかばってくれたり、いつもいつも私のこと守ってくれる。私は、そんな蓮君のことが」

一宮先輩は僕の手を取り、それを彼女は両の手で包むように握って、呟くように、囁くように言いました。

「私はそんな蓮君のことが、好きです。大好きです」

信じられませんでした。どうしてもその言葉が、冗談にしか聞こえなかったのです。ですが目の前にいる彼女は、耳の先から首のあたりまで真っ赤に染め、僕の手は、彼女の熱と震えを、鮮明に伝えているのです。

「だから私のこと、避けなくてほしいな。蓮君に避けられるのはえっと、その……苦しいよ」

すとんと、僕の胸に何かが落ちてきました。あ、一宮先輩も僕と同じだったんだ。僕の行動や一言一言に一喜一憂して、苦しくなっ

たり嬉しくなったりしてたんだ。そう思うと今までの気恥ずかしさや、居心地の悪さは消えてなくなってしまう。

ゆっくりと右手を抜き取り、先輩の手を包むように握ります。思っていたよりも彼女の手は小さくて、乱暴に扱えば壊れてしまいそうなほどでした。

「あなたは、いつもいつも強引で、僕の話聞いてくれませんよね」先輩の肩が僅かに跳ね上がりました。もう彼女と目があっても苦しくなることはありません。

「横暴で、強引で、勝手気ままで、暴君みたいです。人の話を聞かないのは当たり前で、いつも僕を巻き込んでくれて。こっちの身にもなれっぺんですよ。迷惑千万この上ないです」

僕がなにか言うたび、先輩がどんどん小さくなっていくように見えます。それが面白くて、ついつい言い過ぎた感がありますが、一宮先輩自身自覚があるようで、反論はしてきません。

「おかげで退屈とは無縁の毎日を送れています。毎日、今日は何をしてくれるんだろうって、考えることも楽しいんです。一宮先輩に合うのが、毎日……楽しみなんです」

段々と言葉を重ねるのが難しくなっていくます。間違いではないと思うのですが、正解でもないような、妙な気分になるのです。

彼女は僕の言葉を黙って聞いています。何を言えばいいのか分かりきっているのですが、その言葉がするっと出たら、どれだけ楽になれるのでしょうか。一度大きく深呼吸して、先輩から目をそらし、ポツリと。

「僕も先輩のことが　一宮さんのことが好き……なんだと思います！　多分ですよ、多分！！　そんな嬉しそうな顔しないでくださいよ、もう！」

好きと言ったとき、一宮先輩の顔がどんどん笑顔になっていった、自分がいった言葉がどれだけ直接的で、ひねりのないものかというのがよく分かり、もっとかっこいいこと言えばよかったと後悔したのですが、彼女が一言「嬉しい」と言っただけで満足してしまう僕

は、単純なんでしょうか。

「へへ。蓮君がはじめてちゃんと呼んでくれた」

どういうことでしょう。僕はいつでもちゃんと、先輩の名前を呼んでいるつもりでしたが、なにか間違っていたのでしょうか。段々と不安になってきます。正直に告げれば、先輩は笑いながら「ごめんごめん」と言いました。

「一宮さんって、呼んでくれたじゃない？」

「それが良かったんですか？」

「ん」と、先輩呼びもいいけどさ、なんか距離があるみたいで寂しいから。それで」

そういうものなのでしょうか。先輩の言っていることは、僕には少し、分かりませんでした。

僕はベンチから立ち上がり、きよとんとした目でこちらを見ている彼女の前に立ち、一言。

「僕と、付き合ってくださいませんか」

彼女のきよとんとした顔が、段々と楽しそうな微笑に変わり、そして

「はい、喜んで」

林檎はもう、真っ赤に染まっています。

歩みだす

本日、彼女と逢う約束があるのですが、またもや僕は、寢坊を
してしまいました。もしかしたら朝に弱いのかもかもしれませんが、そ
んなことを考えている場合ではありません。彼女を待たせているの
です、12月に外で待つのは寒いに決まっています。愛しい彼女を
そんな中に放っておく彼氏がどこにいるでしょう。 失礼、今現
在、ここにいました。

慌てて荷物をまとめ、マフラーを首に巻いて外にでます。つめ
たい風が僕の頬を打ち、家の中に押し戻そうとしてきますが、負け
るわけにはいきません。

待ち合わせはあの、様々な思い出が詰まったベンチです。僕達
の待ち合わせは、毎回そこと決まっていました。走って走って、僕
の口から白い息が昇って、そこでやっと自転車の存在を思い出した
のですが、待たせるわけにはいかないという気持ちと、早く彼女に
会いたいという気持ちが、家に戻ることを許してくれず、足が動く
スピードがどんどん速くなって行きます。速く、速く、もつと速く
……！

「あ、蓮君遅いよ」

黒のAラインコートを着て、いつか見た、林檎の花飾りをつけた彼
女が少し怒ったようにでも笑顔で僕を迎えてくれました。

「すみません」

息も切れ切れにそれだけ言い、膝に手をおいて、荒い息を整えよう
とするのですが、なかなか落ち着きません。見かねた彼女が、ベン
チに座るように促してくれました。導かれるまま、そこに腰掛ける
と彼女が寄り添うように座りました。

「すみません……」

待ち合わせに遅れてしまって。寒い中待たせてしまって。こんな格
好悪いところを見せてしまって。

「蓮君つてば、誤つてばっかりだね」

「すいません」

あははと、楽しそうに笑う声が隣から聞こえてきます。本当に、僕は先程から謝つてばかりです。

大分呼吸が落ち着いてきた頃、彼女が僕のコートを引つ張つてきました。なんだろうと思ひそちらに視線を向ければ、彼女がなにかを指さしています。今度はその指が指している方向に顔を向けると、踏み固められた土が、細く長く続いていました。

「この細い道は、一体誰がつくつたんだろうね？」

いたずらっ子のように彼女は笑いました。この道は明らかに、僕が彼女に逢うために踏み固めてつくつたものなのですが、それを僕が聞いてくるとは、僕を困らせたいということなのでしょう。ああ、こんなイタズラさえ愛しさと幸せでいっぱいになっていきます。ですが、彼女の思い通りになるのは癪じやくなので、少しだけいじわるを試みましょう。

「あなたが僕に逢うためにつくつた道ですね」

「え！ 違うよ、蓮君がつくつたんだよ！」

慌てふためき、真っ赤になって否定する彼女。そこまで必死にならなくてもいいと思うのです、わずかに傷ついた気分です。

「そうですね、これからは先輩一人で歩くわけじゃありませんしね。しばらくは一緒です。僕から離れるつもりは、毛頭ありませんが」

呼吸も完全に落ち着いてきたので、そろそろ移動をしてもいいでしょう。隣を見れば、耳の先から頬の先を真っ赤に染めた彼女がいました。

「最初は温かいものでも食べましょうか。寒いところで待たせてしまったお詫びです。行きましょう？」

立ち上がり、未だに座っている彼女に手を伸べます。素直に僕の手を掴んで立ち上がってくれたのですが、俯いたままこちらを見てくれません。

「蓮君ばかり、ずるい……」

彼女はそれだけ眩くと、なにも言わなくなっしまいました。おそらく拗ねているのでしょうが、そんな姿すら愛おしく感じてしまう僕は、きつと正真正銘のばかなのでしょう。でも、こんなばかにならなくてよかったと思っています。もちろん、先輩に伝える気はありませんが。

僕は無神論者ですが、仮に神がいるとするならば、どうしても一つ、伝えたいことがあります。彼女と出会わせてくれて、彼女を知る機会をくれてありがとうとございます、と。ですが、これ以上は感謝するつもりはありませんよ。彼女と今、こうしていられるのは、気持ち合わせりきちんと行動できたから。彼女が伝えてくれなかつたら、僕達は今、こうしていられるはずがないのです。

「ねえねえ蓮君、いきたい所があるんだけど」

「はいはい、どこですか」

あなたとなら、どこへでも。

歩みだす（後書き）

はい、これで島崎藤村の初恋の詩は全て書くことができました
ですが、まだ続きます
あと一話で簡潔になります

林檎は真っ赤に染まっています

私が蓮君のことが好きだって気がついたのは、いつだったっけ。どうして私は彼の事、好きになっただんだっけ。

私をはじめて蓮君と逢ったのは、私が二年で彼が一年の時。彼がケンカしているのを、たまたま見てしまった時だった。その時の感想をまとめるならば、『なにあの一年、超怖い』だった。だって、自分よりも明らかに体格がいい人を片手で投げ飛ばしてしまうような人で。ものすごく怖くて仕方なかったのを覚えている。先輩だから、ケンカを止めなくちゃとか、怖くて逃げ出さなくてたまらないとか考えているうちに、ケンカは終わっていた。三年生五人全員が地面に伸びているのを見るのは、なかなか衝撃的だった。

「ちよつとそのの！　こそこそ隠れているその先輩！　覗くくらいなら手伝いなさいっ！！」

怖い後輩に話しかけられた。もし今逃げ出したら、私もボコボコに殴られちゃうかもしれない！　そう思った私はビクビクしながら彼の側に向かった。

「な、なに……かな」

出てきたのはとても小さい声。もしこれが彼の気に障ったらどうしよう。も、もしかして私、ボコボコ決定！？　彼がこちらにゆっくりと、近づいてくる。ああ、完全に殴られるっ！　きつく目を閉じ身を固くして、やってくる痛みを待った。だけど、痛みなんかいつ

まで待つてもやってこない。ゆっくりと目を開ければ、目の前で猫を抱え困った顔をしている後輩がいる。な、なんだろう、この状況不良さんが猫の世話をしているっていうギャップ萌えポイント？

「この子の手当、できませんか？ 僕不器用で、そういうの全くできないんです」

確かに抱えられている猫は血がにじみ出ている、とても痛々しい。見ている私まで痛くなってきそうだ。

「分かった、手当ね。簡単なものしかできないけど」

「構いません。あとで 学校が終わったら病院に連れて行きますので」

彼はそれだけ言うと、私に猫を預けて、伸びている先輩不良のもとに向かった。

ポケットに入っていたティッシュを水で濡らして、猫の傷を拭きながら「なんでケンカしてたのかな」と聞けば「むかついたんです」と返ってきた。

「集団でその子をいじめていて、むかついたんです。石をわざとその子に当てて、それを楽しんでいて。やめてほしくて声をかけたら生意気だと殴られそうになって……。これは、正当防衛の結果です」

淡々と言いながらも私の腕の中にいる猫を、心配そうに見つめる彼。何だこその姿が、とても可愛らしくて。私の中の彼のイメージが『なにあの一年超怖い』から『不器用で優しい後輩』に変わった瞬間だった。

それから一年後の春、林檎畑でまた逢って。色々世話焼いていくうちに『ちょっと口の悪い、不器用で優しい後輩』になってこれからもずっと、こんな心地い毎日が続くんだと、勝手に思っていたんだ。

でも中秋の頃、突然その後輩 蓮君に避けられるようになって。なんで、どうしてって、ずっと思ってた。もしかしたら私が何か、彼が嫌がるようなことをしてしまったのかもしれない。でも、なにも言わずに避けるなんてひどいよ。それから私は放課後や休み

時間は、毎日のように彼を探した。見つけたときはとても嬉しくて、毎回のように話しかけるけど、彼は目をそらし、曖昧な返事しかしてくれない。

悲しかった、苦しかった、ものすごく胸が痛かった。そしてその時、私は蓮君が好きだったんだって、はじめて知った。嫌われてやっと気がつくなんて、私はなんてバカで、どうしようもないやつなんだろうって、自分をいっぱい責めたけれど、それでも元の関係に……蓮君が私を好きになってくれるわけじゃないって分かっている。だから！ だからいつまでもウジウジなんてしてられない！ 女は強いんだ！ 私は蓮君を探し、話しかける行為を何度も何度も繰り返した。

そんなある日。帰り道で蓮君を見つけたんだけど、いつもと様子が違う。私の（正確に言えば私の両親の）林檎畑を見てはため息をついている。どうしたんだろう、何かあったのかな。気になって気になって、頑張って話しかけてみたんだけど、「先輩には関係ないでしょう」と言われ、呆気無く玉砕。それでも、蓮君にはそんな暗い顔をしてほしくなくて、なんだかんだ言っていると耳に入ってくるうれしい言葉。

「僕は、大勢いる後輩の、一人に過ぎないんですか」
それを聞いたとき、自分の耳を疑ったものだ。それじゃあ、まるで自分だけを見て欲しいって言っているみたいじゃない。

気持ちを落ち着かせるために、蓮君を誘って一緒に歩く。やばい、心臓痛い。破裂して死んじやいそう。いやいや、今死んだらマズイでしょうよ。ああ、でも一緒にいるの久しぶり……。落ち着くどころか、どんどん舞い上がっている私の気持ち。家の近くにあるベンチに連れていき、そこに二人して腰掛ける。こんなチャンスは二度とこないかもしれない。私は思ったことをそのまま、つらつらと話していく。蓮君が好きなこと、避けられて苦しいこと。主にこの2つだったと思う。いっぱいいいで良くは覚えていないけれど、蓮君の表情は覚えている。驚いたように目を見開いたあと、と

ても優しい目になって微笑^{わら}っていた。もう、それは突然だったから心臓が破裂して死んじゃうかと思った。冗談でもなんでもなくて本当に、胸が痛くて死んじゃうかと思って。

その後、蓮君にたくさん悪口を言われてしまったけど、両思いだったってことを知って。こんなに幸せなことはないって、その時思ったの。もう、それだけでいっぱいになって、人めも気にせず大声上げて喜んでしまいましたかった。蓮君が真っ赤になって恥ずかしがっているのも、くすぐったいけどあたたかい気持ちになって。

本当に本気で、この時はこれ以上の幸せはないって思ってたんだ。

私たちが付き合うようになって何年か経った。いつまでも二人でいたいって言えるほど、子供でもなくなった。そのぐらいの月日が私たちの間に流れたの。

蓮君は芸術写真つてのを学ぶため、現在ニューヨークに留学中。会えないのは当たり前で、滅多に電話もできないから声も聞いてない。でも、メールだけは毎日のようにしている。私が今日あったことを報告して、蓮君がそれに返事をしてくれる。時々送られてくる蓮君からのメールには綺麗な風景写真のデータがよく添付されていて。送られてくる夕日や町の写真は、蓮君がいる場所を私に明確に伝えてくれる。

私はアパレル関係の仕事について、毎日てんやわんやしていて、時々なにをしているのかわからなくなる時もあるけれど、毎日がすごく楽しい！ 大好きな洋服に関わることができて、蓮君がとった

写真が見ることができて、今すぐごく幸せ。贅沢を言ってしまったえば、今、隣に蓮君がいてほしい。でも、彼自身も自分の夢のために努力している。私のわがまままで、邪魔なんてしたくないもの。だから、今は我慢の時なんだ。

夜。仕事が終わって、家についた。真つ暗な部屋に電気をつけると、瞬時に明るくなる。……なんとなく寂しいなって思うのは、おかしいのかもしれない。スーツもメイクもそのまま、ベッドに飛び込んだ。今日、ひとつの商談がまとまった。よかったって、嬉しいって思うと同時に一気に脱力感が襲ってきて、疲れて仕方がなかった。

突然、ケータイがなる。この音楽を設定しているのは、一人だけ。慌ててケータイに飛びつき、耳にあてがう。

「も、もしもし！」

「こんばんは、花梨^{かりん}さん。そんなに慌てなくても、急に切ったりしませんよ。そちらは今、夜……でしょうか」

「あ、うん。そっちは？」

「もうすぐお昼です。おなかが減って仕方ありませんよ」

蓮君だ、本物の蓮君の声だ。電子音に置き換えられているからか、なんとなく違和感があるけれど、トゲトゲして優しい、彼の声はつきり聞こえている。どんなことも聞き漏らしたくない私は、一心に耳を傾ける。

「仕事の方は、どうですか」

「あ、あのね。商談がひとつまとまったの。それからこの間出した企画が通りそうで」

「企画の方はこの間メールで教えてくれましたが……。商談は初耳ですね。まあ、なんにしても、これから忙しくなるのには変りないのかな」

「うん。でもね、忙しくなるっていうのに、楽しみで仕方ないの」とんとんと弾む会話。私の気の済むまで話させてくれる彼。なんだか、彼が目の前にいるように感じてしまう。自然と頬がゆるみ、話

したいことがたくさん出てくる。それを余すことなく彼は全部聞いてくれて、相槌と一緒にトゲトゲな言葉も送られてくる。なんだがこのやりとりが、とても懐かしくて大切なものに思えてくる。

『そういえば　今日は1月ですか？』

「うん。三が日は過ぎちゃったけどね」

『ああ、残念。長らく日本を離れると、初詣やおみくじが懐かしくなります』

日本を懐かしむ彼の記憶の中に、私は入っているのかな、なんて、贅沢かもしれない。彼はこんなに私を気にしてくれているのに。

『それじゃあ、そろそろ講義が始まるので、切ります。夜遅くにあるりがとうございました』

「ううん！　私も話せて楽しかった」

『あ、それと……。いえ、何でもありません。じゃあ花梨さん、また』

規則的な電子音が耳に響く。最後に言いかけた言葉がものすごく気になるけれど、電話を切ってしまったからもう一度聞くことはできない。

その日一日、私は彼が言いかけたことを考えて、一日を終えた。

今日は久しぶりの休み。お日様が外にあるうちに二度寝をして、めいっばいゴロゴロしていた。

と、その時。備え付けのインターフォンが私を呼ぶ。外から「宅急便です！」とか叫ぶ声と共に。宅急便？　私、なにか頼んだっけ。不審に思いながらも荷物を受け取って、部屋に持ち込んでみる。宛名にはしっかり私の名前。送り主の欄には……

「蓮君、から？」

送られて来たのは小包。中になにか入っているようでコロコロと音がするんだけど、なにが入っているのかは想像がつかない。

ゆっくりと、包み紙を破かないように開いていく。クリスマスプレゼントを開けるときの気分のような。あながち間違いないかもしれない。

出てきたのは、真っ赤な林檎と、小さな青い箱。それからシンプルな封筒に入った手紙だった。林檎と小箱はテーブルの上に置き、まずは手紙に手をつけた。手書きで書かれたそれは、なんとなく、暖かいような気がした。

まずはじめに、お誕生日おめでとございます。電話で届けることを伝えようと思っっているのですが、僕はちゃんと、あなたに伝えることができているでしょうか。今の僕のままなら、言えてないのではと、心配です。今年は一緒にいられないお詫びも込めて、2つ、送らせて頂きました。美味しく食べてあげてください。僕はその林檎、甘くて気に入っています。

Happy Birthday

く追伸く

最も優しく、もっとも美しいあなたに、変わらぬ思いを込めて。

安島 蓮より

読み終わったとき、自然と溢れる笑み。これ書いているとき、絶対蓮君真っ赤になっってるんだ。最後の追伸のところか、特に。恥ずかしいくせに、なんでこんなキザなことをしてるんだか。

林檎を片手に台所に立ったとき、ふと思いついたんだ、林檎の花言葉を。『誘惑』『名声』以外の花言葉。追伸に書いてあるまま

なんだ。追伸に書いてある2つは、そのまま林檎の花言葉になっている。気がついたら、この林檎を食べるとか、考えられなくなっていて。耳が熱くて仕方ない、熱でも出したかな。……分かってるよ、恥ずかしいのと同時に今私は、嬉しいんだ。

だから私は知らない。青い小箱の中に指輪が入っていることを。

彼の精一杯の不器用な愛が詰まっていることを。

すでに林檎は、真っ赤に色付いています。

林檎は真っ赤に染まっています（後書き）

はい、やっと完結しました

砂糖吐きまくりでした、胸焼けもしてますくおい
こんなベツタベタに甘いものを最後まで読んでいただき、ありがとう
ございました！

此処から先は、二人の設定を書いていこうと思ってますので、興味
がある方のみ、どうぞ

よろしいですね？

安島 蓮 くヤスジマ レンく

父、母、弟の四大家族

伯父が経営している合気道の道場に通っている。ちなみに母は記者、
父はカメラマン

弟の名前は美紅^{リク}。お兄ちゃんが好きなので「ぽつとでた女に連れて
かれてめっちゃ悔しい！！」「らしい

7月19日 AB型

一宮 花梨 くカズミヤ カリンく

父、母、伯母、伯父、祖母の六人家族

家族全員で林檎畑を経営している。花梨も手伝う当たり前
美紅に嫌われているとへこんでいる途中
仲良くなるうと奮闘中でもある

1月13日 A型

林檎の花言葉……最も優しい女性へ・もっとも美しい人へなどなど
カリンとレンの花言葉を調べても面白いかと

ちなみに、指輪についている石はガーネットだったり
石言葉を調べてみても面白いかも。1月の誕生日石だったり

以上、設定に（地味に）こだわりまくっていたお話でした！

では、またどこかで出会うことを期待して

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698y/>

初恋ものがたり

2011年12月29日13時51分発行